

— 次の文章を読んで、問いに答えよ。

新聞や出版関係の集まりで、業界の将来性についてよく質問を受けることがある。私の答えは決まっている。「太宰治」である。そのココロは、「斜陽」。関係者からは自嘲的な笑い声が聞こえ、やがて気まずそうな空気が広がっていくのがわかる。

「斜陽」……西に傾いた太陽、夕日。それから敷衍^{ふえん}して栄えた者が衰えること、あるいは落ちぶれること。辞典で言えばこんなところか。確かに「斜陽族」から「斜陽産業」まで、斜陽には落ちこぼれ、脱落していくという衰退のイメージが漂っている。

〈1〉少子高齢化や人口減少、過疎化や「新しい貧困」、格差の拡大や固定化など、何かにつけて日本の現状には、最盛期を過ぎた「斜陽」のイメージがつきまとい、未来への不安と悲観的な予測が伴いがちだ。その最大の根拠になっているのが、人口減少である。二〇一五年現在の国勢調査によれば、日本の総人口は一億二七〇九万人。前回の調査（二〇一〇年）からほぼ一〇〇万人の減である。これは、国勢調査の始まった一九二〇年以來の減少であり、この傾向は地方で顕著なだけでなく、大阪府のような大都市圏でも、一〇年の調査から二万数千人の減で戦後初めての減少になっている。さすがに東京都は増加しているとはいえ、それでも増加率は前回の一〇年の調査の四・六三%から二・七〇%に鈍化しているのである。

〈2〉ざっと国勢調査の数字を拾っただけでも、地方だけでなく、大都市圏でも縮んでいく日本というイメージが浮かぶ。だが、果たしてこれは日本だけの現象であり、特別に日本だけが人口の著しい減少と高齢化の圧力にさらされ、衰退しつつあるのだろうか。ここで立ち止まって考えてみなければならぬ。「斜陽」は日本だけの現象なのか、それは否定的な現象であり、衰退、消滅を意味するのか。そもそも「斜陽」とはいったい何を意味しているのだろうか。

〈3〉福沢諭吉の『文明論之概略』のネタが一九世紀半ばに活躍した英国のヘンリー・バツクルの『英国文明史』やフランスのフランソワ・ギゾーの『ヨーロッパ文明史』であったことからわかるように、「明治維新一五〇年」、日本の近代の歩みは、近代ヨーロッパの「熱い時代」から圧倒的なインスピレーションを得てきた。「熱い近代」とは、化石燃料をエネルギー源に労働力と科学技術の向上をテコに生産力を高め、国富と国力の増大を図る無限進歩に取り憑かれた時代を指している。もちろん、同時にそれは、明治の日本で言えば、「万機公論に決すべし」の「五箇条の御誓文」にあるように、立憲主義と議会制による民

主義の確立の時代でもあった。

〈4〉 こうした「熱い近代」のあり方を、福沢は巧みにも「一身独立して一国独立す」と簡潔に表現した。個人が自らをトウヤシながら公共の空間を通じて国政に主体的に参画する。そして国家がそうした一人一人の個人の内面を通じて担われる。こうした国家こそ、国富と国力の点で最も強い国家というわけである。福沢の理想とその後の現実がどうであれ、明治維新一五〇年、日本はそうした「熱い近代」の、非欧米地域における最大のトップランナーであったと言える。

A、その中身を見るならば、「熱い近代」とは、「追いつき追い越せ型」の、先行者を絶えず乗り越えていく強迫症的なエネルギーに駆られた近代化にはかならない。

B、それは、実際には家父長制支配と資本主義的な合理化、そしてナショナリズムが結びついた、「男性中心」のジェンダーバイアスが著しい時代を指していたのである。

C 強迫症的なエネルギーが、どれほど内面性の病理をもたらすかを、国民的作家・夏目漱石は、名作『それから』の中で主人公の代助をして「牛と競争をする蛙と同じ事で、もう君、腹が裂けるよ」と言わしめている。

「腹が裂ける」。明治維新一五〇年の半ば、日本はまさしく「敗戦」という腹が裂ける、壊滅的な破綻を経験した。

〈5〉 しかし、それからほぼ七〇年近く、戦後の日本は高度成長という「熱い近代」の再現を通じて、国富と国力で「ジャパン・アズ・ナンバーワン」と呼ばれるほど、世界の垂涎の的に返り咲いたのである。「富国強兵」ではなく「富国弱兵」であるにしても、日本は二度の「熱い近代」の波乗りに成功したと言える。

〈6〉 ただ、そうした「熱い近代」を焚きつけていたのは、人口の増大が国力の土台であり、人口は幾何級数的に増大し、それに対して生活資料は算術級数的にしか増大しないという、マルサス主義的な圧力である。それは、戦前は、欧米列強に倣った帝国主義的な植民地争奪戦への参入となり、戦後は、海外への集中豪雨的な過剰輸出による貿易立国への発展となった。戦前も戦後も、人口は増大するという仮定のもと、ひたすら生産力の増強に励んできた歴史であったと言える。

幕末期の日本の人口がほぼ三〇〇〇万人ほど、明治初期が三五〇〇万人くらいだから、明治維新から一五〇年、日本の人口は、先の大戦による落ち込みがあつたにしても、三倍以上に膨れ上がっているのである。イギリスやフランスが、同じ期間でほぼ

一・五倍ほどの増大であることを考えると、日本の人口増加がいかに著しいかがわかる。また日本と同じような近代化の過程を辿り、戦争の体験も経たドイツでも、イギリスやフランスよりも伸び率が著しいとはいえず、日本ほどの増加率は示してはいない。アメリカ合衆国は移民国家として単純に日本と比較にはならないが、日本の増加率を桁外れに上回っているのは、韓国である。しかし、韓国の場合、「圧縮近代」と言われるように、「熱い近代」を短期間に偏頗な形でぐり抜けてきた経緯もあり、出生率は日本以上に低く、少子高齢化のスピードはハイペースである。

何れにしても、明治維新一五〇年、世界的に見ても、アメリカを除いて主要な先進諸国が人口減少の傾向に移り変わりつつある。一九八〇年を一とした場合の人口増加率の予測で言えば、二〇五〇年に日本は〇・九以下になり、ドイツですら、一を切ることになるはずだ。韓国の場合、日本以下の増加率になることは確実である。明らかに「熱い近代」を支えていた人口動態が根本的に変化しつつあり、おそらくそのトレンドは不可逆的に進んでいくに違いない。この意味で「斜陽」は日本だけの現象ではなく、むしろ文明史的な現象となっているのである。にもかかわらず、斜陽化を嘆くのは、あくまでも「熱い近代」をスタンダードにし、そこからの逸脱としてしか「斜陽」を捉えきれないからではないか。

日本のような先進諸国では、識字率の向上と女性の高学歴化、社会参加とともに、晩婚化や無姻化が進み、もはやそれは不可逆的な傾向となっている。日本の場合、出生率は二〇一五年現在で一・四六で、主要欧州諸国と較べても低く、これを下回っているのは、韓国の一・二四くらいである。このように「熱い近代」を根底から支えている人口動態的なトレンドそのものが大きく変化し、それが文明史的な変動とリンクしていることがわかる。この点を科学史家の山本義隆は、「科学技術総力戦体制の破綻」「成長幻想の終焉」と指摘し、持続可能な発展・開発を可能にする文明への転換を説いている。こうした認識は、「明治維新一五〇年」セレモニーとヨクサンの動的な動きを見る限り、必ずしもメジャーになっ**て**いるとは言いがたい。それでも、地方創生の新たなパラダイムを求める試みや自然再生エネルギーの開発、小規模生産・流通・消費ネットワークの形成など、様々な取り組みが**簇生**しつつある。

ただ、それでも、そうした文明史的な転換を背景とする、日本の安全保障のビジョンとなると、かなり手薄であることは否め

ない。ここでは、「熱い近代」の終わりりと文明的な変化を背景に、日本の安全保障のビジョンについて語ってみることにしたい。少子高齢化や低成長、あるいは「定常化社会」の到来が喧しく議論されながらも、そのほとんどが日本国内の地域や社会の問題、つまりドメスティックな問題に絞り込まれ、その対外的な側面に目が向けられないのはどうしてか。本来なら、そうした人口動態と文明的な変化を背景に、国の安全保障のあり方そのものを再考察する機運が盛り上がってもいいはずなのに、そうした兆しは萎んだままだ。その理由は、日本列島が直面する安全保障上のリスクが極めて差し迫った脅威として共有されているからである。

J・F・ケネディ米大統領が、Dな核戦争の危機を、ギリシア神話の「ダモクレスの剣」に例えたエピソードに倣えば、日本列島は毛髪一本で抜き身の剣をつるしたような、Eの危機の中にあるという脅威感が、中長期的な安全保障の選択肢を考える余地を奪っているとも言える。力による脅威には力によって対抗しなければならぬ。そのためには、地政学的な戦略に基づく同盟関係（日米同盟）の強化と最新の兵力、装備を整え、「最小限の防衛力」という抑制的な安全保障の概念を一掃し、ハード、ソフトの両面にわたってこれまでの「タブー」を打ち破り、より積極的な軍事力の充実と機動的な運用が必要である。こうした地政学的なリアリズムに基づく軍事優先の安全保障の考えが台頭しているのである。こうした力による平和と軍事力への過信、さらに地政学的な戦略などは、ある意味で「熱い近代」そのものの再来と言えないことはない。

斜陽の時代の日本の安全保障を考える時、いつも念頭にあったのはドイツのことである。東西で同じような軌跡を描きながら、「熱い近代」をくぐり抜け、大戦で傷ついた二つの国は、今、対照的な位置にいるように思えてならない。

確かにヨーロッパ連合（EU）は、財政危機や英国の離脱表明、難民問題などで揺れ動いている。その統合のカナメであるドイツも、国内的には決して安定しているとは言いがたい。しかし、同じように少子高齢化の波に洗われ、確実にひと頃のピークを過ぎて斜陽へと向かいつつあるとはいえ、ドイツでは、保守派も含めて、少なくともメインストリームの中に「熱い近代」よ、もう一度、という声は大きくなっているわけではない。しかも、ドイツを取り巻く近隣諸国との間に、日韓、日中の間のような緊張が走っているわけではない。

さらにドイツはアメリカの出先機関的な役割を演じているわけではなく、むしろトランプ大統領のアメリカには是々非々の立場を堅持しているほどだ。イランの核開発放棄の交渉では国連安保理常任理事国と一緒に重要なパートナーの役割を果たし、またウクライナ危機ではプーチンのロシアとも米ロ関係を取り持つブローカーの役回りを果たしているのである。また軌道修正したとはいえ、難民問題では人間の安全保障の点から、最大限の配慮を惜しまなかったのも、メルケル首相率いる保守連合のドイツである。

もちろん、ドイツを取り巻く国際関係とその歴史とは、日本とは違うという、月並みな言い訳が返ってくるに違いない。しかし、それにもかかわらず、ドイツが比較的、「熱い近代」からなだらかな斜陽へと舵をきることができたのは、対外的に見れば、その構想力に裏付けられた外交力の賜物である。それは、明らかに一国の国民の「士気」に根ざす「頭脳」の賜物でもある。

それを実感したのは、個人的に言えば、戦後五〇年を記念する日独フォーラムに出席し、旧西ドイツで「東方政策」を外務大臣として担い、ミハイル・ゴルバチョフとともに「東欧革命」の先鞭をつけたハンス・デイトリッヒ・ゲンシャー氏の言動にふれ、深い感銘を覚えたからである。彼の言動には、保守政治の最良のものが満ち溢れ、同時に、歴史によって培われた、あらゆる力は相対的なものであるという信念が息づいていたからである。そこに私は、構想力のある外交力の片鱗を見る思いだった。ないものねだりではなく、日本には斜陽にふさわしい賢明な「外交大国」の余地があるはずだ。理想とビジョンを忘れた「現状維持」の外交は、国民の「士気」を低下させ、「頭脳」としての外交の質の劣化をもたらすだけである。

(姜尚中の文による。なお一部を改めた)

注 ヘンリー・バツクルIIイギリスの歴史家。

フランソワ・ギゾーIIフランスの政治家、歴史家。

ジェンダーバイアスII文化的性差に関する偏見。

マルサスIIイギリスの経済学者。

問1 傍線①、③のカタカナを漢字に改めよ。楷書で正確に書くこと。

問2 傍線②、④の読み方をひらがなで書け。

問3

A、B、C

に入れるのに、最も適当なものを、それぞれ次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- | | | | | | | | | | | |
|---|---|------|---|------|---|------|---|------|---|------|
| A | 1 | だから | 2 | しかし | 3 | むしろ | 4 | やはり | 5 | つまり |
| B | 1 | ただし | 2 | もつとも | 3 | そこで | 4 | やがて | 5 | しかも |
| C | 1 | そのうえ | 2 | それから | 3 | そうした | 4 | けれども | 5 | かえって |

問4

次の一文は、本文中の〈1〉～〈6〉のどこに入れるのが最も適当か。その番号をマークせよ。

ここで大きく俯瞰ふかんして見れば、私たちは今、大文字の「近代」(Modernity)の斜陽という文明史的な変動のプロセスの中にあると言える。

問5

傍線⑦に「文明史的な変動」とあるが、その説明として、最も適当なものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 これまで日本の人口は欧米諸国と比較して著しく増加し続け、それが「熱い近代」を支えてきたが、今後の人口増加率はきわめて低く推移していくこと
- 2 少子高齢化や人口減少により地方だけでなく、大都市圏でも縮んでいくという、まず日本で始まった現象は、人類の文明の大きな曲がり角を示していること
- 3 新聞や出版といった業界が「斜陽産業」になっていくことは日本だけの現象ではなく、世界の主要な先進諸国でも人口が減少し、メディア企業を取り巻く状況が悪化していること
- 4 地方創生や自然再生エネルギーの開発、小規模生産・流通・消費ネットワークの形成など、ドメスティックな問題とともに、文明を支える安全保障上の大きな変化が起こりつつあること
- 5 戦後日本の高度成長をもたらしたのは、人口の増大と海外への集中豪雨的な過剰輸出であったが、それはこれまでの欧米列強の歴史と同じであり、これからの日本は人口減少によって大きく変わることに
- 6 化石燃料をエネルギー源として、労働力と科学技術の向上によって生産力を高め、無限に進歩していくという概念にとらわれていた「近代」が終わりを迎えることあり、持続可能な発展・開発に向かっていること

問6

D

E

に入れるのに、最も適当なものを、それぞれ次のなかから選び、その番号をマークせよ。

D 1 挑発的

2 意図的

3 一方的

4 偶発的

5 運命的

6 感情的

E 1 因果応報

2 一触即発

3 一発必中

4 絶体絶命

5 空前絶後

6 暗中模索

問7

傍線①に「構想力に裏付けられた外交力」とあるが、ドイツの外交の背景にある考え方として、最も適当なものを、本文中からそのまま抜き出して、一五字で書け。

問8

本文の内容に合致するものを、次のなかから二つ選び、その番号をマークせよ。

1 日本における少子高齢化や人口減少、過疎化や「新しい貧困」、格差の拡大や固定化などは、国富と国力の点で最盛期を過ぎたことを示している。また、出生率も主要欧州諸国と比較するときわめて低く、世界的にみてもかなり例外的な状況に陥っていることが分かる。

2 国勢調査の数字をみると、日本では著しい人口減少と高齢化が進展しつつあり、近代ヨーロッパを参考に生産力を高め、民主主義を確立してきた明治以降の日本の近代化は今日、転換点を迎えつつある。しかし、人口減少は世界的な傾向であり、斜陽化を嘆くほどには至っていない。

3 日本の人口は明治維新から一五〇年の間に三倍以上に増加し、イギリスやフランスと比較しても著しい増加率であったが、現在では日本の出生率は主要欧州諸国と比べても低くなっている。識字率の向上と女性の高学歴化、社会参加によって晩婚化や無婚化が進展しているからであり、対策が必要である。

4 幕末期、明治期、そして近年まで日本の人口はほぼ減少することなく増大してきた。日本よりも人口増加率が高かった韓国では「圧縮近代」と言われる時代を経て、人口の増加率は鈍化し、二〇一五年現在の出生率は日本よりも下回るといふ現象が起きている。

5 日本の安全保障のビジョンには地政学的なりアリズムに基づいた軍事優先の考え方が出てきており、明治以降の近代化路線を思わせる。一方、日本と同じように大戦で傷ついたドイツではアメリカ、イラン、ロシアなどとの関係においても

構想力のある外交を展開しており、二つの国は対照的である。

6 日本が核戦争の危機を回避するためには「最小限の防衛力」から、積極的な軍事力の充実と機動的な運用へと転換することが必要である。これは日本列島が直面する安全保障上のリスクが極めて差し迫った脅威として考えられているからであり、その背景には「熱い近代」の終わりとは文明史的な変化がある。

問9

本文のタイトルとして、最も適当なものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 「斜陽の日本」の賢い安全保障のビジョン
- 2 「人口減少時代」における近代の再構築
- 3 「明治維新一五〇年」の人口増大戦略
- 4 「核戦争」の危機と近代の清算
- 5 「少子高齢化」と定常化社会の到来
- 6 「非欧米地域」のトップランナーとしての日本

問10

太宰治の作品を、次のなかから一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 オリンポスの果実
- 2 白痴
- 3 火宅の人
- 4 夫婦善哉
- 5 焼跡のイエス
- 6 晩年

二 次の文章を読んで、問いに答えよ。

東松照明氏を訪ねお話を伺ったのは、もう十年も前のことになってしまった。それは雑誌『美術手帖』に、さまざまな分野で仕事をする作家に直接会って話を聞き、作家論を書いて連載していた時だった。記憶力のないわたしが、東松氏のいわれた「映体」なる言葉を今も忘れずにいるのは不思議であるが、その「映体」なるいい方はそれ程に刺激的であった。

その時、東松氏は、おおよそ次のようにいわれた。長崎を撮っても、沖縄を撮っても、その写真は東松照明の写真になってしまい、そこに自分の映体がつくられてしまっている。撮りたいのは長崎であり、沖縄である。必要なのは映体ではない。自分の映体をぶちこわし、すて去るには、もう自分がだれかと入れ替わるしかない――。

映体とは勿論、写真のスタイルのことであるが、文体をスタイルといい直す場合とちがいで、写真特有の意味も当然含まれる。わたしはその時、東松氏のいう映体なる言葉をよく理解しないまま文章を書いた。

ところで、十年ぶりに、この夏（一九七八年七月）ふたたび写真について東松氏と話す機会があった。その時、映体の発生、あるいは映体の出現について聞くことができた。

生活体験、感覚的な嗜好、人間や自然に対する意識無意識にもっている考えや態度等が未分化に入りまじって、それらが、なんでもない景色を見ても、必ずそのひとの視線を導いていくモノや場所や人間がある。たとえば大きな葉をつけた樹木には必ず目がいき、こわれかけた建物には必ず目がいくというように、他人の目は素通りするのに自分だけが特にこだわりをもつものがある。カメラをもっていると、どうしても、そういう自分だけが好きな、あるいは気がかりな、時には嫌いなものを写してしまう。自分だけが必ず見ってしまうものがある。興味あるもの、素通りできないもの、気にかかるものが、必ずだれにも固有にある。その目が導くものを撮りつづけてきた、という風なことを東松氏はいわれ、それが映体になるんでしようといわれたのだった。

東松氏はおつとうまく A に喋られたが、視覚によって生まれるスタイルを、こんなに明晰な説明で聞いたのははじめてである。わたしは、自分の書く小説の文体の発生をこんなふうにうまく説明できない。といって、ここで言語による文体の発生についての議論を試みるのは場ちがいである。

役者馬鹿という言葉がある。いい代えれば役者であることに人間全部が埋没していることか。いい意味にも悪い意味にもとれ、また両方に使われる。芸事、仕事は、多かれ少なかれ、人間をその芸事、仕事の馬鹿にする。また馬鹿に徹する者なればこそ、そのひとのする私的な芸談が

B

な事実、真実を述べている場合がある。

ところで東松氏の映体論にある私的な視線は、写真馬鹿のそれではない。むしろ逆に、写真家的見方、写真家的視線におちいることを警戒する気配がある。カメラをもっている東松照明という写真家を、たえず見張っている普通の人間東松照明がいる。カメラの扱いに慣れた人間だけが見てしまふ、というより見てしまひやすいものを、うしろで私的なこだわりでものを見る人間がマネージしている。私的なこだわり、私的な興味、私的な思い入れでつい見てしまふものを、カメラが見なければ写真にならぬことに、どこか不信が働いている。表現の道具たるカメラという機械の働きを全的に信じてはいない。この写真家には、カメラの目よりも、自分の目の方が大事であり、その目の走っていく行先や行方がおもしろいのだ。写真はあくまで、自分の目とカメラの目が重なり、その両者の関係によって出てきたものである。この関係論は観客にとっても興味が湧く。人間の目とキカイの目が、恋をしている男女の関係のように一体となることはあり得るだろうか。対象へ距離をとる前に、手にしているカメラに冷静にして正当な距離感を、この写真家はもっている。つまりこれは、「写真」への批評という荷物を、自分の写真に背負わせているともいえる。こういう写真は世間にゴロゴロころがってはいない。東松氏の写真にこもる熱と冷気のバランスは、このひとの写真にもつ批評によってつくられたものと受け取れる。

この夏、東松氏との対談の折に、興味深かったのは、純文学、大衆文学の伝でいくと、写真にもそういうことがあるのかというわたしの愚問に対する、親切な東松氏の説明であった。また、プロとアマのちがいについてのお話もおもしろかった。どんな仕事にもその仕事の世界にのみ使われて通用する術語や符牒があるが、写真の世界のアマチュア・カメラマンの意味には特別なものがあるらしかった。純文学、大衆文学も文学の世界の一種の術語である。

こういった術語を他の世界に共通する言葉によって共通する問題として語ることはむずかしい。東松氏には、それをあえて行うことで、術語によって表わされる内容の虚の部分を見抜こうとする態度があった。わたしは東松氏の冷静な思考の力に感動し

た。良くも悪くも、写真馬鹿にはできぬことであつた。だからこそ、この写真の達人は、押せば写るというカメラの出現によつて、玄人の写真が問われるおもしろい時代がきたといえるのだつた。たしかに今、写真にとつておもしろい時代が到来している。写真が芸術に成り上がりかけている時代にわれわれは居合わせており、それは一方でカメラの大衆化が、カメラというキカイをだれでもが扱い得るといふ大衆化を含むことで、写真家の写真を問うおもしろい時代の出現に居合わせているのである。東松氏は、その時代にあつて「写真家」という術語に居直る前に、こういつたおもしろい時代にフォーカスをちゃんと合わせているのだ。

東松氏のいわれたことでもうひとつ興味深いことがあつた。それは「群写真」という言葉が使われたことだつた。「組写真」ではなく「群写真」である。これは写真にとつて重要な問題をはらみ、また写真の表現について重要な問題を提出している。

「組写真」なるものは、写真に、物語性をひき出すのではなく、それを無理強いに背負わせる。しかも、その物語性は、写真自体のもつ表現能力を軽蔑すること、写真を一場面の説明の手段にしてしまふ。時間と空間が与える写真特有の制約が表現に逆転するはずのものを殺すことで、写真以外のナニカを表現しようと企てるのだ。かといって、一枚一枚の写真をまるで古典の絵のように、オリジナル一点ものの作品として扱うことで、写真のもつ表現能力はふくらまない。一点ものの作品扱いは、結局、写真を絵画への追従者たらしめるだけである。写真の絵画に拮抗しうる表現能力は、絵画のもつ作品性とは別のものであるはずで、それが概念化されないと写真は写真の芸術化を実現しえない。

写真は一点ではなく群である、というのは、したがつて、表現としての写真のあり方を表明するというより、その宣言と見られる。写真集という表現方法も、写真展と同様に、「群写真」としての写真表現である。また、「群写真」は、これはいい写真だ、これよりこつちの方がいい、などという印象批評を拒絶する。つまり、「群写真」は写真の思想の表明に他ならない。

写真は今や、日本特有の詩の形式、短詩型の俳句に似ているところがあるように思われる。俳句は新聞に多くの素人のつくる句をのせる欄が必ずあるほど、庶民大衆がなじんでいるものである。それはタシナミやタノシミでつくられる。これは、日本人が世界でも珍しいくらいに写真機をもつて写真を撮ることが好きなのと共通する。一枚の写真は五七五と同様、短いリズムであ

り、カメラをもつ庶民大衆は写真を日常のタノシミでとる。その心情は、昔の庶民大衆がしていたさまざまなタシナミ芸、タノシミ芸に代るものを求めたものであり、その要求が押せば写る簡単なキカイを生んだ。しかし、それら素人の俳句も写真も、「点」であり「群」とはならぬ。ここにも共通するものがあつた。「群写真」という東松氏の言葉は、写真表現の奥を深く掘つていこうとする意欲のあらわれとも受け取れる。わたし自身、俳句ではないが詩を書いていたことがあるので、「群写真」という言葉からさまざまな暗示を受けた。

(富岡多恵子『兎のさかだち』による。なお一部を改めた)

問 1

A

に入れるのに、最も適当なものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 刺激的
- 2 情熱的
- 3 論理的
- 4 直接的
- 5 写実的

問 2

B

に入れるのに、最も適当なものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 客観的
- 2 具体的
- 3 芸術的
- 4 大衆的
- 5 普遍的

問 3

傍線①に「『写真』への批評」とあるが、その説明として、最も適当なものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 人間の目とカメラの目とが一体となるような関係を目指しながらも、カメラに対し冷静にして正当な距離を保つこと
- 2 カメラが見なければ写真は成立しないと考へながらも、カメラの働きを全く信じていることができず不信の念を抱くこと
- 3 私的なこだわりでものを見ることを重視しながらも、正当な写真家的見方になっていかどうかを見張っていること
- 4 カメラの目より自分の私的な視線を大切にしながらも、それが写真家的視線におちいついていないかを冷静に見ること
- 5 人間の目とカメラの目の距離のバランスを保ちながらも、写真馬鹿におちいらぬように普通の人間の目をもつこと

問4 傍線①に「おもしろい」とあるが、何が「おもしろい」のか。その説明として、最も適当なものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 押せば写るというカメラの大衆化により表現能力も大衆化したこと
- 2 玄人と素人とどちらの写真が芸術的か比較されるようになったこと
- 3 簡単なキカイの登場で素人の写真でも芸術的なものになり得ること
- 4 写真の芸術化の流れの中でプロの写真の表現の本質が問われること
- 5 大衆化したカメラの出現によって誰でもが写真の達人になれること

問5 本文の内容に合致するものを、次のなかから一つ選び、その番号をマークせよ。

1 東松氏は、小説の術語である純文学と大衆文学という区別が写真にもあるのかという難解な問いに対して、小説と写真の世界に共通する問題として真摯に回答された。しかし、現実には、写真界ではプロとアマチュアのカメラマンのちがいは歴然としているということも冷静に語られた。

2 「組写真」は一枚一枚の写真を組み合わせることで物語性を付与しようとするが、かえって写真の表現能力そのものを損ねてしまうことになる。それに対して「群写真」という概念は、「群」として表現し、また一枚一枚の印象批評をはねつけることで、写真の思想の宣言となりえている。

3 押せば写る簡単なキカイの出現で大衆化した写真は、日本特有の短詩型の俳句と似通っており、俳句が広く庶民大衆のタシナミ芸として普及していったように、素人の写真も今はタシナミ芸の域にすぎないが、やがて俳句のように写真表現の根底を変えていくようなものになると感じている。

4 「役者馬鹿」は役者を離れても常に役者であり、いわば己の「存在」がすべてそこに埋没しており、いい意味にも悪い意味にも使われるが、「写真馬鹿」は写真を撮るという一事だけに徹しているため、どうしても私的なこだわりにおちいるので、どちらかという悪い意味で使われることが多い。

5 東松氏のいわれた「映体」という言葉は、写真のスタイルのことで、自分だけが好きな興味あるものに惹かれ撮りつけてきた結果、それが「映体」になってしまおうという。「わたし」はその言葉に刺激を受け、ここでの議論にはならないが、小説の文体について必然的に考えざるを得なくなった。